

ニュースレター

No.35

CHRISTIANITY AND CULTURE RESEARCH INSTITUTE KANTO GAKUIN UNIVERSITY

細々と、しかし地道に！！

大学宗教主任 理工学部教授 松田和憲

「いのちを考える」研究グループは、2001年10月の本研究所発足の時からずっと細々と、しかし地道に、「いのち」に関する諸問題についての研究活動を続けて参りました。その研究活動の報告と、その研究成果については、年毎の『キリスト教と文化』誌において記載してきました。このたび、ニュースレター35号を「いのちを考える」研究グループ特集号としてくださること、大変嬉しく思います。私たちのグループの特徴と言えば、その分野における、いわゆる専門家はおらず、それぞれの問題意識から「いのち」に関するアップ・トゥ・デイトな話題やテーマを掲げて、ある時は半年ないし1年、また、あるテーマについては2年がかりで考察すると言った具合の形態をとってきました。基本的には、一つのテーマを掲げ、その都度、発題者あるいは発表者を決め、その担当者が用意してきたプレゼンテーションをもとに自由な討議を行い、それを積み重ねて、最後はまとめる形で「キリスト教と文化」誌にて記述しております。また最近のことと言えば、2012年1月には、前年3月11日、東日本大震災において直接大きな影響を受けた3人の発題者を招いて、「いのちを考える」研究グループ主催のシンポジウムを開催しました（詳細は『キリスト教と文化』第11号を参照されたい）。

今回のニュースレターでは、ここ1～2年、大学生の「いのち」に関する意識調査を踏まえ、鈴木先生による、学生たちが「いのち」をどのように捉え、また、いかに自覚的に受け止めているかの調査結果に基づく分析レポート、また、三輪先生による看護学における「いのち」の教育についての考え方、そして、長谷川先生による、緩和医療における心のケアという視点から「いのちの終わりをどうサポートするか」との事例研究、それぞれのご紹介をしておりますので、お読みください。

「いのち」への気付き

「いのちを考える」研究グループ 鈴木公基

「いのち」が大切であるという意識は、誰もがもっているものなのでしょうか？

多くの大学生は自分のいのち、また、他人のいのちについて大切であると捉えているようです。私の調査では90パーセント以上の大学生がいのちは大切であると認識していることが分かりました。しかし裏を返せば、いのちを大切だと思うことのできない大学生も、確かに存在するというところでもあります。自分のいのちについては7パーセントの者が、他人のいのちについては4パーセントの者がいのちを大切だと認識していませんでした。いのちを大切であると思えないのには理由があるはずですが、それは、必ずしも不道徳だからとか、いのちをバカにしているから、といった理由ではないと思われれます。少ない割合ではあるものの、これらの人々がなぜいのちを大切に思うことができないのか、丁寧に考えていくことが必要だと思えます。

大学生の「いのち」意識について、特徴的であると思われることはありますか？

先ほどもお話ししたように、いのちを大切だと思う気持ちは多くの大学生がもっているものです。ただし「いのちの重み」ということとなると、それとは矛盾していると思えるような結果が得られました。「人によって『いのち』の重さに違いがあると思いますか」という質問をしたところ、実に4割近くの大学生が、いのちの重みには違いがある（「とてもそう思う」と「そう思う」を合わせた割合）と、答えているのです。「いのちは大切だ」という気持ちをもちつつも、どこかでいのちを区別してしまう気持ちも持ち合わせているようです。いのちに対するアンビバレントな心理を反映しているようにも思われます。

なぜこのような結果が得られたのかを考えてみると、現代の社会状況の影響があるように思われます。現代の日本社会では、必ずしも人々が公平に暮らすことができているわけではありません。所得格差の増大や「勝ち組」「負け組」のような捉え方をする社会的風潮が存在します。これらがいのちの重みの認識に影響を及ぼしていると考えられます。ただし注意しなければならないことは、この結果が必ずしも悪い意味ばかりをもっているとは限らない、ということです。いのちの重みについて疑問を持ちつつ、それに向き合っている若者たちの姿がそこに示されていると捉えることもできるでしょう。少なくとも、この問題は大学生ばかりでなく社会全体の問題として取り組んでいくことが大切なのではないかと考えています。



interview with

Kouki Suzuki

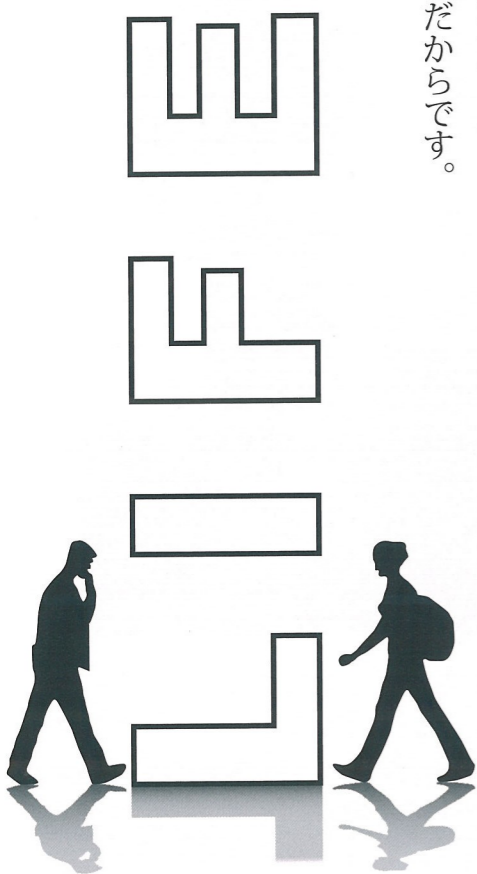
人を助け育てていくことを通して、自分自身の成長・発達へつなげていくことのできる、そのような人材を育成していくことが大きな目標という鈴木公基所員。今の大学生たちは「いのち」についてどう考えているのかを聞いてみた。

「いのち」の意識が芽生えるために、必要な要素は何でしょうか？

私の調査からは、いのちの大切さにもっとも影響を及ぼす要素は「一緒にいると安心できる人がいる」であることが明らかにされました。これは大学生に特徴的な結果でした。といたしますのも、私は共同研究者とともに、過去に小学生・中学生を対象とした調査を行いました。そこでは、「日々の生活が楽しい」と思えることが、いのちを大切だと思えることと強く結びついていました。大学生になるとそうではなくなるというのは、とても興味深い変化です。では、大学生はなぜ安心できる人の存在といのちの大切さの認識が関係するのか。その理由について、発達心理学の観点をふまえて考えてみました。大学生はいわば大人へと成熟しつつある存在です。成長の過程では、楽しいことばかりではなく悲しいことや辛いこともたくさんある、ということを実感するでしょう。そのようなとき、安心できる友人や恋人、言いかえれば自分のよいところもそうでないところも受け容れ、共感してくれる人物が重要になります。もしそのような存在を得ることができれば、自分自身を「それでよい」と思うことができます。これは自分のいのちを大切にすることにつながるでしょう。同時に、自分自身を受け容れて入れてくれる相手の存在も、貴重だと思えるのではないのでしょうか。つまり、他者のいのちをも大切だと思えるようになる、ということとです。ちなみに、一緒にいると安心できる人が存在する、ということ以外には、「自分のことが好きである」「こと、」自分の生まれたときの話を聞いたことがある、「ことがいのちの大切さに影響を及ぼしていることが明らかにされています」。

「いのち」の意識を育てるためには、どのような教育が必要でしょうか？

少なくとも、いのちを大切だと思えるようになるためには、「互いに認め合える他者」「共感しあえる他者」の重要性を理解してもらうことが必要なのではないでしょうか。いくら「いのちが大切だ」と声高に叫んだとしても、それはスローガンにはなってもいのちの大切さを実感させるものにはならないでしょう。現代の若者においては、ひとりひとりの人間が大切だと実感できる機会が必ずしも多くはないのです。若者たちの中には、対人関係を避けようとする者たちも少なくありませんし、表面的な人間関係のみに終始してしまい、深い付き合いをもてない者たちもいるでしょう。ですから、生身の人間同士が関わることを、そして、互いの生き方を理解し合い支え合っていくことが、充実した人生を送るためには必要不可欠であることを伝えていくことは重要でしょう。同時に、それを実感できるような場を設定・提供も教育に求められる役割です。例えば、学生同士がコミュニケーションをとりながら進められるような授業展開にすることも有効でしょう。また、教える側もできる限りひとりひとりの意見をくみ取りながら、それらに可能な限り応答していくような努力は大切なのではないかと思います。教育活動の中で、人間同士の関わり合いが生まれ、活発に展開されることが求められるでしょう。なぜなら、教育的活動は、「認めあう」という点では絶好のものだからです。





「いのち」の終わりをどうサポートするか 緩和医療におけるこころのケア

カウンセリングセンター 長谷川伸江

日本で緩和ケアが導入されたのは1973年淀川キリスト教病院で、医師、看護師を始め、ソーシャルワーカーやチャプレンで構成されたチーム医療が最初に行われました。それから40年、法的な整備の影響もあり、“cure”ではなく“care”を目指す姿勢や、身体的な苦痛だけでなく、社会的・精神的・スピリチュアルな側面も含めた全人的苦痛を和らげようとする緩和ケアは、現在では日本全国に広がっています。患者さんを様々な側面からサポートするために、専門性の異なる医療スタッフが協力しあう緩和ケアチームが定着し、臨床心理士も他のスタッフと連携しながら、こころのケアを担当するようになりました。

がんと付き合っていくことは、多くのストレスや不安と背中合わせです。がんが疑われたとき、診断が確定したとき、治療が始まったとき、そして再発したとき…この先自分がどうなっていくのかという不安だけでなく、家族や会社はどう伝えたらいいのか、闘病に伴う意思決定の連続の中、誰にも相談できず迷いが深くなることもあります。がんを宣告されたとき、患者さんや家族は、治らない病であることを自覚し、どうなっていくのかわからない先行きの見えない予後に不安を感じます。また、大人であれ子供であれ、自分の病気のせいで家族に迷惑をかけられないと、病になった自分を責めたり、なぜ自分が病気になったのかと怒りがわいてくることもあります。このように、闘病の道のりには、様々な辛さが伴っています。臨床心理士はその一人ひとりの患者さんに伴走し、その人らしい生を全うしてもらうために丁寧に話を聞いてサポートし、患者さんとその家族の調整役を担っていきます。さらに、患者の会や残された家族のグリーフケアに関わる場合もあります。

また、緩和ケアでは、スタッフを支えることも心理士の役割だといわれています。患者さんを支えるスタッフは、患者さんとの距離が近いほど、病の進行に伴って不全感や無力感を感じる場合があります。患者さんや家族とのやり取りに無意識のうちに巻き込まれて、感情的に疲弊してしまう場合もあります。こころのケアの担当者には、患者さん、家族、医療スタッフに共感する気持ちを持ちながら、一方で俯瞰したまなざしを維持していくことが求められます。研究会で松田和憲教授から、この姿勢はチャプレンとして意識していることと重なる、とコメントをいただいたことがあります。暖かさや冷静さを持ち合わせていくことは、対人援助の際の共通項なのかもしれません。

今年、研究会では新設された看護学部から新たな先生をお迎えしました。実学でケアの精神を伝える看護学の視点から、本学のいのちの研究がさらに深まることを希望いたします。

闘病の辛さへどのように寄り添っていくのか。「いのちを考える」研究グループでは、具体的な事例を交えた検討が行われたという。

interview with

Nobue Hasegawa

看護学における「いのち」の教育

看護学部准教授 三輪のり子

看護学部は、本学の校訓「人になれ 奉仕せよ」を具現化するものとして2013年4月に新しく開設されました。看護は、人の生から死までのすべての過程に関わりますので、医療技術だけでなく、ベースとして思いやりのある豊かな人間性を育むことが大切です。その意味において、キリスト教の精神を教育理念としている本学は、まさに看護の心、そして「いのち」に向き合う姿勢を培うにふさわしい環境であると思います。

看護学は、そのすべてが「いのち」の教育であるといえますが、狭義では「デス・エデュケーション(Death Education)」が挙げられます。日本では、「生と死の教育」、「死の準備教育」等のように呼ばれることもあります。これは、例えば「いつ・どこで・どのように、死を迎えたいか」をイメージしたり、医療にまつわる様々な倫理的課題について考えたりする過程を通して、自らの死生観の問い直しをするものです。死生観は、医療の考え方や様々な決定に大きく関与しますので、看護職にはとくに死生観を育成しておくことが強く望まれます。一般に、個人の死生観は、文化や宗教に大きく規定され、その上に個人の体験・思考の傾向などが加わり形成されるといわれています。しかしながら、核家族化がすすみ家庭で死を看取ることの少ない時代に育った今の学生達は、医療現場で死を初めて体験する機会が多いのが現状です。そのため、看護教育のなかで意図的に「死」について深く考える機会を与え、それに伴い「生きることの意味」を模索することで、自分と同様に他人の人生もかけがえのないものとして捉えて援助する姿勢を養う必要があります。

また、私が担当する老年看護学も「いのち」の教育として重要な位置づけにあります。全死亡者の約9割は高齢者であり、高齢期は人生の完成を目指す最終ステージだからです。授業や実習では、健康面だけでなく、その人が長年歩んできた軌跡(ライフヒストリー)にも目を向け、対象の人生観・生きがい・信念をふまえて「その人らしく過ごせること」を目標に全人的に援助する大切さを伝えていきたいと考えています。その効果を高めるためにも、教養科目「キリスト教学」における教えや本研究所の活動で得られる知見を、ぜひ活かしていけたらと思っています。



関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501

横浜市金沢区六浦東1-50-1

電話：045-786-7873(研究所直通 月~金曜9:30~17:30)

FAX: 045-786-7806(研究所直通24時間受け付)

発行者：渡部 洋

Director: Hiroshi Watanabe